

---

あとがき  
Postscript

河野貴美子  
KAWANO, Kimiko

総合人間学会発行のオンラインジャーナル『総合人間学研究』第14号をお届けします。

このジャーナルの編集まとめ役を前任者から引き継ぎ、新たにお受けしたものの、私自身は今までもっぱら医療系、理工系の実験内容中心の論文に関わることが多く、この学会におけるような内容を十分に把握しているとは言えず、大変戸惑っているというのが正直なところである。それはともかく、ここ2、3年、このジャーナルへの投稿数は減少傾向にある。今回も初回、7篇のエントリーがあったものの、投稿辞退、査読後の辞退などで2篇となり、急遽今回のみの特例措置として秋に第2次募集を行った。2次募集にも当初は5篇のエントリーがあったが、投稿されたのは3篇、そして最終的に本号に掲載された投稿論文は全4篇のみとなった。

今回からさらに、投稿種別の見直しも行い、今までの「論文」、「報告」、「エッセイ」に加えて、「研究ノート」のカテゴリーを設けた。「研究ノート」とは、研究を発展・活性化させる知見、問題提起、展望、資料紹介などで、字数は論文、報告と同様としている。詳しくは投稿規定をご覧ください。研究大会におけるシンポジウムを中心とした内容は、書籍版としてすでにオンラインジャーナルからは切り離されているが、今年度からその業務も「出版プロジェクト」として別途立ち上がり、編集委員会はこのオンラインジャーナルの発行が主たる任務となった。委員も体制も年々変わっていく編集委員会にあって、スムーズな引き継ぎ体制とともに投稿規定など、細部にわたる見直しを行う時期かと思われる。2020年度の課題としたいと考えている。さまざまな問題を抱えながらも、編集における先輩諸氏にアドバイスをいただきつつ進めていたところ、想定外の新型コロナウイルス感染拡大問題。不慣れな上に、集まって顔を合わせての会議ができず、発刊に手間取ってしまったことをまずはお詫びしたい。

そのような中で、早くからご投稿いただいた今号の論文はそれぞれ特徴的な内容でどれも興味深い。本間氏は西欧で花開いたピアノ文化が日本においてどのように根付いていったか、富裕層のものから大衆化していく過程を、その中心となった2名に焦点を当てて論じている。小倉氏は、多くの研究者の言を引用しながら、生物学的なセックスや社会的なジェンダー論だけではなく、脳の視点も取り入れて、セックス化、超セックス化さらに再セックス化、非セックス化などさまざまな論を展開した。次の河野氏はマルクス・ガブリエルの著者「なぜ世界は存在しないのか」について詳しく検討し、彼の新実在論をわかりやすく解説している。福田・砂子論文は、V.E. フランクルにおける実存を彼の特異な収容所体験やその著書から、「人生の意味」、「人間存在の本質」などを説き、自他の関係性などモデル化するこ

---

とで、共生への方向性を明確化する試みを行ったものである。続く「研究ノート」は前述したように本号から追加したカテゴリーで、投稿規定に“研究を発展・活性化させる知見、問題提起、展望、資料紹介など”としているように、論文より気軽に時宜を得た話題を論じていただけるものとして設けたもので、今回は河上氏にご自身の経験と第14回研究大会のプレシンポジウムにおける報告をもとにした投稿をしていただいた。

この「プレシンポジウム」とは、次の「報告」のカテゴリーの中で、穴見氏が詳しく説明しているが、第14回研究大会のシンポジウム（テーマ「いのちのゆれの現場から実践知を問う」）に対するプレ企画として大会の3ヶ月ほど前に行われたもので「今、対話的实践による「総合知」のあり方を問う」として3名の報告者がそれぞれ話されたものである。

その報告者の一人、穴見氏はその中から、本ジャーナルにおける「報告」として「総合知」、「全体知」、さらに専門知や個別知など、総合人間学会としての「知」のあり方をあらためて会員に問いかけている。

また、研究談話委員会からの「緊急報告」として、古沢氏が現在社会を震撼させている新型コロナウイルスについて、総合人間学会の見地からの様々な見解、そしてそこから今後の学会活動への提起を展開している。武漢在住の女性作家、方方さんの「武漢日記」からの引用が印象的で、今後学会としてどのように活動していくか考えるべき提起であろう。

さらに、若手シンポジウムは「岐路に立つ知のあり方とそのこれから」のテーマのもとに報告された3篇および大倉氏の総括を掲載した。大倉氏のまとめた報告があるので、ここに詳しくは述べないが、それぞれに過去における賢人の実例から「知のあり方」について論じていて興味深い。徳重氏は荻生徂徠の「会読」からその学問論を、小林氏は福沢諭吉の「実学」を捉え直し、堀内氏はデリダの「大学」論を主題に大学の、そして知のあり方を論じたものである。

他には会員の最新著書5点、並びに本学会編集の書籍「総合人間学14」が紹介されているので、これを参考にして、ぜひ手に取っていただきたい。

今年に入って急速に広がった（発生は2019年）新型コロナウイルス感染症（COVID-19）。その蔓延により、2020年6月に予定されていた研究大会開催は中止せざるをえなくなった。これに伴い、研究大会において「一般研究発表」を予定されていた会員は今年度の口頭発表の場を失うことになってしまったわけであるが、オンラインジャーナル15号は発行の方向で考えている。今後の総合人間学会からのお知らせ（ニュースレターやホームページにおける掲載など）をご覧の上、誌上発表、次回研究大会発表（2021年6月の予定であるが、さらに延期もありうる）など、ご検討いただければ幸いである。

最後に、慣れない編集で戸惑いながらでしたが、周りの編集委員に助けられ、さらに本学会幹事（編集担当）の鈴木朋子会員には多くのご助力をいただきました。ここに心からの感謝の意を表します。

**【かわの きみこ／国際総合研究機構／脳科学】**